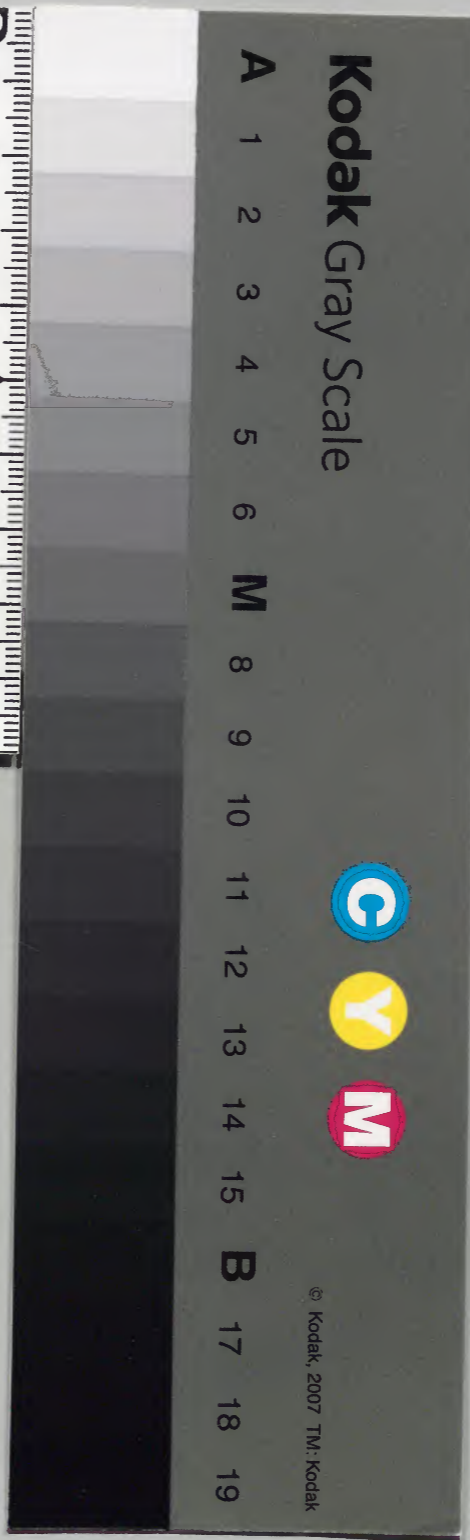


武家名目抄 職名部 五十五

四 五 六	四 四 九	冊 架 冊	二 五 二 〇 六	函 號 類	和 書 門
-------------	-------------	-------------	-----------------------	-------------	-------------

一 五 三	四 五 大	函 冊 架	二 五 二 〇 六	函 號 類	和 書
-------------	-------------	-------------	-----------------------	-------------	--------

内閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (56)
函號	153 275



留守居

留守居頭

平留守居

留守番

城代

城番

定番

加番

陣代

又稱
軍代

武家名目抄第五十五冊

職名部卅二

留守居

吾妻鏡

云建久元年二月六日庚寅與州飛

脚參着申云去月廿三日出彼國訖云云況

新留守所本留守共有兼任同意之罪科無

左右雖可被誅誓被預葛西三郎清重可召

甲二百領之過料三月十五日巳巳左近將



素より富山李部より供ひ祈禱多し十二日始て
八幡へ三々社集十二日に兼息三々集上申水
富山李部より別所對面より集由祈加
言及又某氏等共々々々々々々々々々乃上
言及退出後富山李部祈禱多かり出多其由後
うり上
十二日 素より富山李部より同五
ヶ集より祈禱多かり十四日巳刻子
還由

快元僧都記云天文四年八月當月十六日

向甲州氏綱進發為駿州扶佐云云因茲社
頭造營奉行事陣參之間御留主之人數窪
田入道関新神尾入道被印付
赤杉記云天文七年小塔山子居形此處の時
雲州尼子政久等出、私の所弘岡とのを
急出急少、居子に一味、少塔も此の
久塔も小塔も此の居る所を、其の所の権系強河
久塔も此の居る所

織田家譜云天正五年十二月三日信長放鷹於尾州三州以菅屋九右衛門為安土留守

家忠日記云天正七年八月十二日家一様渡松、往伯岡崎山城、本多作左衛門正為主居、被考其狀

甲陽軍鑑云勝頼小條天正八年辰卯夏五月伊豆駿河の境沼津より城般取居考其後

景勝と其子の敵討押し、其子元為守居申持多言板彈正多見源五右衛門頼元其子沼津に持多より、但川中流く程多き事、故五右衛門後より其件

安土日記云天正十年二月九日信長信濃國に至り可被成御動座付り條御書出畧中一攝津國勝三郎也田信輝留守居候系兩人子共人数二可出陣、其五月廿九日信長御上

洛安土本城御留守衆津田源三郎殿加藤
兵庫頭野村又右衛門遠山新九郎世木
弥左衛門市橋源八槨田忠兵衛抄り加後已下二平
為多居多々
今川記云信玄引取
甲州條氏政ト信玄ト薩埵山
ニテ百日對陣被成日、足輕迫合ノ處ニ
家ノ先手駿府へ攻来リ山形三郎兵衛
カ留守居ニ罷在候ヲ追落候間信玄此由

ヲ聞テ甲州ハ山越ニ引入ハ字著陸
甲陽軍鑑云信玄代忠
人教條信州ノハ字著陸
留多居多々

太閤記云尾州犬山
城落居條犬山乃城一ト中河
勘右衛門尉是身勢州嶺之城為者
手多居多々勝入亦武山ノ城為多居多々
事天ノ幸や田因ナレハ武山ノ其迄
乃親考ノ日多居多々其城を

高元才學初入由祓申云々

又云 東山少田 三月移日子打立先陣等富士

乃格^レ由井蒲系道子充滿^レは後陣ハ

尾濃^レ子^レ抄^レり毛利^レ子^レ輝^レ元^レト

也古^レ為^レを^レ新^レ多^レ別^レ四方の軍勢^レて聚樂

中^レ活^レ外^レ活^レ度^レ也^レ是^レ日^レ沙^レ活

一^レ左^レ城^レ多^レり

盡名家記云天正十二年五月十日一夜伊

達正宗檜原ヲ打立玉ノ其勢三千餘騎ニ

テ八田付ノ山ヲ越工會津ニ赴キ玉ノ檜

原ノ御留守居ニハ大森四郎左衛門尉國

直ニ二千餘騎ノ勢ヲ相添^レ殘置玉ノ

多聞院日記云天正十五年三月三日關白殿

新日ト出^レ一^レ定也 中京ハ前田又左衛門守

ハ葉^柴花前^ト云^レ正^レ為^レ被^レ付^レ了^レ大板ノル

スハ次多^レ情也ト云^レ女房^レ在^レモ悉^レ被^レ否^レ具

了事ノ據高麗南邊大元唐マテモ切入下
少ニタリ

矢島十二段云天正十八年十月五日に矢

島殿考正礼最上ノ中より被奉_ル供_ヘ侍

中_ニ多_ク金_ノ庭_ニ金_丸畧_シ外_ニ糶_云百_餘人

矢島少城留_ル古_ノ以_テ去_ル太_正殿_ノ芥_川持_津

森_ノ情_掃部_糶云_ト百_餘人

毛利家記云天正十八年二月吉公相州ノ

北條為御退治小田原御出張_ノ時大和

納言秀長卿下安藝宰相輝元聚樂_ノ御留

守居トシテ残_シ被_置

豊臣太閤事書云丹波中納言此方_ノ一_百

寄_ル北條令用_意一_左右_ノ付_ル八月_以前_在

前_ノ久_ク借_ル米_等之_條山口_ノ之_被任_事也

八月_以前_ニ被_任事_ノ寄_ル豊臣_ノ名_護屋_ノ以_留寄_ル

之_被任_事之_寄ル_豊臣_ノ名_護屋_ノ以_留寄_ル中_務

卿法系_二可_レ被_レ爲_レの_二以_レ令_レ用_レ意_二可_レ被_レ爲_レ修_レ出_レ
事

伊達成実記云彈正所存ニ不慮ノ儀ヲ以
普代ノ主君ヲ相背伊達殿ノ御奉公仕候
流石ニ主君ノ御子勝三郎殿ヲ某引立政
宗公ハ參傍輩ニ奉成事モ天命モ口惜ク
佛神三寶ニモ可_レ奉放卜感テ中新田ノ御
留守居南條下総所迄正三郎殿ヲ奉送候

抄勝三郎_二爲_レ大崎
義隆ノ男ナリ

氏郷記云越中國其後中村ノ者トモ此ヨ

シ安濃ノ奉行所ハ出テ申ケレハ織田上

野ノ殿ノ奉行所ヨリ松カ島ノ留守居小

倉豊前守上坂兵庫助ハ届アリ云々

東亂記云松田隱謀上野國ヲシノ城ハ成

田下総守氏長居城也氏長并第左衛門佐

ハ五百余騎ニテ小田原ニ籠リ留守居侍

酒卷鞞負以下四百余騎楯籠ル
元長老勸化帳云式抄石山了ち法了海判式
抄石村上すけり為り居判抄抄石やきさり中
書判

板板卜齋其長記云其長五年家一様近日下
野へ一可被成法者一少少出居少殿口陽去不富去
り為少居去く申大寺の門初りちよ中つり
らにと被中後れ

松原自休手録云内府違一條
城太閤様被置候留守居被進出私人數
被入置事云々
又云伊賀國上野城羽柴伊賀守依為公味
方欲上後東國其内留守居早夕渡城新
莊越前守守之伊州於途中聞此告進退失
途後加関力原勢云々
又云大坂西丸内府留守居佐野肥後

又追出六輝元居之佐野ハ為方ナク加伏
見云々
増補家忠日記云慶長五年八月六日石田
治部少輔三成真田安房守昌幸ニ一翰ヲ
投ス去三日之少狀今六日子刻至佐和山
系若令被見也中先書ニ在中也大坂西ノ丸
少内府留主居之也亦石田居少之追出也
遠伏見之味西ノ丸、移輝元也云々六

年三月廿三日大神君大坂ノ城ヨリ伏見
ノ城ニ移リ玉ノ大坂ノ城御留主居トシ
テ天野三郎兵衛康景ヲ西ノ丸ニ残置
慶長見聞記云大友宗嚴大友豊後ハ下リ
普代衆ヲ催シケレハ悉馳付ケル間内府
方ノ衆ノ領地ノ留守居代官ヲ所ニ追出
シ押領シケル
續撰清正記云少基の在り南冥城代荒後
の石書立條

少後英作 信正の口と 何獲傳代 後 加後信

左高口 中 熊本城 為 居 右 方 田寺久太

夫 信正 中川嘉林 信正 下川又左信

門 信正 中川嘉林 信正 下川又左信

當代記云慶長十二年閏四月廿九日遠江

懸川二被居城一松平隱政守伏見二可在城

一由大御所同將軍令下知給十二月松平

隱政守伏見西ノ丸二去夏ヨリ在城有ケ

共知行于今相渡ルハキ沙汰ナケレ

彼家中ノ上下疲勞不斜本丸ハ此以前ヨ

リノ留主居家定番也其外松ノ丸ヲ始丸

丸番衆關東衆有之

會津陣物語云 會津御 江戶御留主二ハ御

舍第松平因幡守康元石川日向守家成也

所奉行二ハ板倉四郎左衛門勝重并代官

ハ伊奈熊藏忠次同江戸二被指置ケリ

子ありてはしき高をほしむるもはなすつり又考
は六波羅にありて京都のや後をつつり
りくもてふやとよつりされ後ふつりゆり
六波羅あり 三利殿に事仰しおれをほしむる
しりは六波羅の事をもいふ
おとつりつしき磯右にていなるり
多士をよむ武をよむとてれや云に加きてふ
おとつりつしき中はつり後おとつり
人々の種をもつりつしき將軍おとつり大名

後ありてはしき高をほしむるもはなすつり又考
は六波羅にありて京都のや後をつつり
りくもてふやとよつりされ後ふつりゆり
六波羅あり 三利殿に事仰しおれをほしむる
しりは六波羅の事をもいふ
おとつりつしき磯右にていなるり
多士をよむ武をよむとてれや云に加きてふ
おとつりつしき中はつり後おとつり
人々の種をもつりつしき將軍おとつり大名

三郎殿加藤兵庫頭野村又右衛門遠山
新九郎世木弥左衛門市橋源八橋田忠兵
衛二九御番衆蒲生右兵衛大輔木村次
郎左衛門鳴海助右衛門祖父江五郎右衛
門雲林院出羽守佐久間与六郎兼浦次郎
右衛門福田參河守千福遠江守松本為足
丸毛兵庫頭前波弥五郎山岡對馬守是等
ヲ被仰付
按卷代記に是等城守者之在是凡は書あり
一呼多思少子傳自氏、為其の首領多し其地

卷二九書名と曰く
城守の語多し

勢州軍記云 犬山合 池田勝入以調畧執尾

州犬山城也彼犬山城主中川勘右衛門尉
為勢州峯城番手留守也古池田為当城主
有_一好与在民等合心執之

愚耳旧聴記云 波岡 城中以是為守居の

名とて傳ふ人老を是置給ふ是傳多し
考ふ傳書と其地之なる

按多事書よりつたに多線ありと主於他りあま
はあはれけとの志の城郭の所接ありあま
さる事書を城書よりつる事書よりあま
つる事人加ふ事向事の人より限る事ありと
此を城代書よりつたに多線ありと主於他りあま
るもの方より主物の居城ありと主於他りあま
されり城書よりあま事書よりあま事書より
主物の中に主別子城代よりつたに多線ありと

事れり事書よりあま事書の廣狭よりあま
つたに多線ありと主物の居城ありと主於他りあま
るもの方より主物の居城ありと主於他りあま
されり城書よりあま事書よりあま事書より
主物の中に主別子城代よりつたに多線ありと

城代

義經記云判官殿よりつたに多線ありと主於他りあま
終ふると其かろれありと主物の居城ありと主於他りあま
つたに多線ありと主物の居城ありと主於他りあま

新撰長祿寛正記云遊佐河内守カ長臣中
村岡部ト云者有又今参り馬場ト云兵ア
リ中村ハ若江ノ城代ニ留り岡部兄弟ハ
先陣ヲスヘシト思ケル處ニ勢カサ有ト
テ馬場ヲ申付ラレ

陣ヲ旁トシテ以テ古妻入在自流壱石濱ヤ
岡陣は物トシト古臼井城ハ自流へ領して城
代を古臼井に
快元僧都記云天文七年十月七日小弓衆
打負御曹司様上様御舎第基頼御討死小
田原方安藤備前上様御手ニ掛り討死三
浦城代横井神助上様明義奉射落松田弥次
郎御首奉討取

鎌倉大雙紙云孝胤ハ敗小古と云共味方も長
陣ヲ旁トシテ以テ古妻入在自流壱石濱ヤ
岡陣は物トシト古臼井城ハ自流へ領して城
代を古臼井に
快元僧都記云天文七年十月七日小弓衆
打負御曹司様上様御舎第基頼御討死小
田原方安藤備前上様御手ニ掛り討死三
浦城代横井神助上様明義奉射落松田弥次
郎御首奉討取

甲陽軍鑑云 山本勘助 天文十四年五月十三日

辰の刻り時信公甲府を以てあり同十三日

に古むろへ多路^云日山の城代版寄多郡別古

むろ北城代小山田備中吉田彈正を免しむろ

の郡の様もくけくはまき・被成

室所り死云 被方り被 置押條 本國参人：以て中評隊

多て先傳言北要言をあらむぬ城代了志加

と一々々人をあそくしとくし先申島の城を

善後一不お替三好能あす義長を城主とて

今軍の要言も修理をくけくはまきとく

多細川曲之既を以て多版寄の城に多堀深く堀を

水ハ多たもく之送母本を二重りむむのせとて好

十休多城代とて

東乱記云 松山合 松山落城ノ科ナリトテ

輝虎自身誅伐ニ城ヲハ北城丹後守ヲ城

代ニ籠メ輝虎ハ取陣ニ入りケル

甲陽軍鑑云 信長へ祝言進物條 永禄壬辰年六月上

旬より甲州信長より信州伊豆飯田城代

秋山伯耆守を以て使し被事美濃至岐阜の

鐵田信長より信長に祝儀の事信長答云

安土日記云元龜二年二月廿四日磯野丹

波降參申佐和山城渡し進上候て高島

罷退則丹羽五郎左衛門為城代被入置

候キ

新田老談記云謙信公モ前橋へ御出馬被

候御逗留へ内小桑淵ヲ御責有テ落城以

後長尾殿へ城被進城代ニ新井圖書ヲ足

利ヨリ被置ケリ

又云桐生へ城代ニ横瀬勘九郎殿ヲ被遣

ケリ藤生紀伊守ヲ相添テ諸支配ヲ改テ

天正二年三月九日ニ由良殿モ御入部被

遊云々

由良家傳記云相生寺に八申の事發生紀伊
少と申若き少の事才豊多事し別を以て
少の事 中六兩の時分を以て彼を以て
を取越一府攻り仕ぬ少案相生の城屋中紀
伊少の事子に仕ぬ少其存別彼少城代に彼少
少能伊少に七年の時了少の事 織田家譜云天正七年十月滝川一益攻伊

丹城 中城代荒木久左衛門之降曰願往尼
崎 既攝津守可献尼崎花熊兩城然則赦父
母妻子之死一益許之

凌正記云 信隆少秀者 少合我條 秀者少富田の寺田に少降を

少の事 中城代荒木久左衛門之降曰願往尼
崎 既攝津守可献尼崎花熊兩城然則赦父
母妻子之死一益許之 秀者少富田の寺田に少降を
凌正記云 信隆少秀者 少合我條 秀者少富田の寺田に少降を
少の事 中城代荒木久左衛門之降曰願往尼
崎 既攝津守可献尼崎花熊兩城然則赦父
母妻子之死一益許之 秀者少富田の寺田に少降を
凌正記云 信隆少秀者 少合我條 秀者少富田の寺田に少降を

伊達成実記云長沼、城主新國上総盛氏
御取立ヲ以長沼、城代ニ被差置候ハト
モ政宗公御ホコサキニハ抱候事成間敷
由存御佗言申上知行不相替御前相濟若
松ハ伺公仕御目見工申サレ候
羽尾記云ソノコロ吾妻郡岩櫃城ニ上杉
景勝ヨリ齋藤攝津守ト云者城代ニサレ
ヲキケリ

北條五代記云江戸の城跡此城を以りて名大將
今此代まゝ至天正年中まゝ北條治朝少輔

喜山喜山唐揚門城代ト云
大友記云高橋三河守元高橋三河守ハ毛

利元就ニ使者ヲツカハシ藝州勢ヲ相催
シ立花ハ打出ル戸次白杆吉弘即時ニヨ
セカケ追クツシ藝州勢ヲコトニク海
ニ追籠蘭部ヨリ引返ス其後白杆進足津

留原掃部ハ怒留湯主殿助ヲ同國立花

城代ニ召ヲカル

仙道云天正年中ハ佐竹澄理大夫義重人

教ヲ多白川ヲ取テ被テ責ム付テ後ニ義親威

氏ハ後ニ責ム於テ入リ由テ被テ責ム早ニ速ニ威氏被テ出ス

日川ハ不ノ攝テ佐竹領志館其外ハ少シ城六所

責ム身代在居至被申取

松原自休手録云二連木口ハ取手ニ被

置戸田主殿吉田ニ為テ質入母依レ之常ニ来

吉田城代大原肥前ト成交以テ雙六催興密

談母我欲與家ト卿然ハ忍テ可ニ盗出云

々

又云江戸ノ御仕置城代松平因幡守石川

日向守云々 按會津陣物語ハ松平石川の
直氏を以て居る事と記す

又云若狭羽林ハ公ノ依レ為テ縁者被加テ伏見

城代敵未襲来以前ニ諸將恨隔心色出奔

洛下云々

慶長見聞記云 肥後國 加藤主計頭ハ内府

公味方ナレハ関ヶ原合戦ノヤウス兼テ

聞エシカハ小西カ城ヲ攻メト熊本ヲ立

テ木山越ニ宇土城ハ取詰ル間南條元宅

ト云者宇土ノ城代成シカハ島津方ハ加

勢ヲ請籠城ス

會津陣物語云 責取白石城條 登坂心ヲ變シ人質

ヲ取替シ白石城五方石ノ約束ニテ降参

シ政宗人数ヲ二ノ丸ハ引入シカハ本丸

ノ城代豊野又兵衛鹿子田日向守切テ出

防候ハトモ不相叶落城ニ及ヒ豊野ヲ始

百七十一人討死シケル

加藤清正侍帳云式万指石七斗五升八

代城代加藤石三石六石七斗五升八

四石石鈴口助石橋門

當代記云慶長十三年十二月去秋松平周

防守干時下野國丹波國前田主膳去秋領

分令拜領相上於丹波主膳屋敷上山急被

為普請ケルカ城ニ戌間敷トテ自十二月

頃被止ケルト也

續撰清正記云家集の共南冥城代堀記後加藤

某作清正の阿蘇城代堀豊後加藤清左衛門

秀部城代堀日向加藤万三清清正の佐敷城代

堀熊加藤与左衛門水没城代堀薩中村將

監清正の宇土城代中川与郎平清正の又八

代城在者無本城留与右ノ与共田寺久太

夫清正の中川嘉林清正の下川又左衛門

云々清正の十六年七月晦日堀与右衛門下川又左

清正清正の

土屋初貞私記云慶長十九年大坂陣之

与所々清正の伏見山城代杉平隠岐与成瀬

古右衛門日下部為右衛門大守書二組根来

二組 按承院リテ教ノ隱岐ヤシの
佐藏あり全々の城代あり

柘城代多博代官を主首的あり何省阿そ

まに代々居候をあるハ所子此号何の前

衆は毛ワへるまゝく大層々居る居候

ともふを建て一族も一といふ長おを

神々終る々々織あり又三村の居候あり

を新るまに城代の長何りて一門長おと

限りてまゝもはふる福をそ級々るる

多しとてこれとも一城をやるつらやあまは

武勇の器を撰をそ々此とあり思意

まをそ補そまぬありひまて何まうそ

武家にとりて規模とてそへそ織

城番

東乱記云 義同計 早雲ハ三寄ニ城ヲトリ

立テ房州ノ敵ヲ防キ玉フ義同ノ勢所

ヨリ召出サレテ此城ノ在番ス
舟岡山軍記云佐々木与三三好カ家臣松
永彈正忠久秀軍ノ摠大将トナツテ七千
餘騎ニアマレリ筑前守旗本モ七千騎ニ
不過其外一族千騎二千騎抱ヘタル者四
國ヨリ在番ニ上リ飯盛ニ詰居タリ安藝
守モ手勢三千騎其外江州大名共在番ニ
上レハ松永隙ヲ伺フ便モナク一兩年ハ

過ニケリ

勝軍地藏山軍記云將軍地藏山合戰條江州六角左

京大夫義賢ハ細川一清ノ次男ヲ取立テ

畠山高政ト牒シ合慈昭寺ノ太嵩中尾

ノ城ヲ重テ築キ立テル勝軍地藏山ノ

城是也略中三好長慶ハ飯盛城ニ有ケルカ

大ニ驚キ先畠山方ヲ打手トシテ舍第物

外軒入道実休ヲ大将トシテ高屋城ニ當

番衆阿州衆淡州衆七千餘人岸和田表へ
出張して畠山方へ陣所ヨリ立五六町隔
て對陣す近江衆ハ永原安藝守ヲ大将ト
シテ一萬餘騎ニテ勝軍地藏山ニ籠置ト
聞エケレハ三好方ヨリモ諸軍責寄ラレ
永原モ手勢三千騎其外江州大名共替
り替りニ在番シ雜兵二萬騎ト聞エケレ
ハ三好衆隙ヲ伺フ便モナク矢軍計ニテ

過ニケリ
松原自休手録云永祿三年五月上旬義元
率四萬餘ノ軍勢後駿府發向尾州十七日
着陣池鯉鮒先手ハ至皆懸愛智皆懸ニハ
駿河勢在番鳴海八岡部五郎兵衛大高ハ
鷲殿長助持ケルヲ後信長大高ヲ攻取ニ
ト丸根ニ取出シテ入置佐久間大學
信長記云蘭奢待被截條四月三日大坂ヨリ勢ヲ

出シ足輕ヲ懸ク心處ニ手痛ク押拂七首
少ク討捕押寄作毛悉薙捨近邊放火ニ天
王寺在番ノ仕置等佐久間ニ被仰付御上
洛アツテ五月廿八日岐阜ニ御下向有ケ
リ枯少水多附
城の塔多あり
安土日記云天正六年十二月十一日所
ニ御取出被仰付信長公古池田ニ至テ被
移御陣御取出次第御在番衆塚口神戸

三七殿惟住五郎左衛門蜂屋兵庫蒲生忠
三郎高山右近毛馬北畠殿織田上野殿滝
川左近武藤宗右衛門倉橋池田勝三郎勝
九郎幸新父子三人原田中川瀬兵衛古田
左助刀根山稻葉彦六氏家左京亮安藤平
左衛門友川郡山津田七兵衛殿古池田塩
川伯耆賀茂中将殿御人数高槻之城御番
手ノ衆大津傳十郎牧村長兵衛生駒市左

衛門生駒三吉湯淺甚以猪子次左衛門村
井作右衛門武田左吉茨木之城御番手衆
福富平左衛門下右彦右衛門野村三十
郎中島中川瀬兵衛七小少屋高山右近大
天田安部仁右衛門
家忠日記云天正七年八月七日家十岡崎
へ渡越ぬ所城番松平上野柳原小平太北
へ夕ノ城番松平玄蕃格殿八郎三郎手

前共三人

當代記云天正十年五月信長上洛之給御
供ノ衆纒二小姓衆百五六十騎被召具安
土本丸御番津田源十郎遠山新九郎已上
七八人二ノ丸御番蒲生右兵衛大夫森二
郎左衛門山岡對馬守已下已上十一人也
松原自休手録云光秀弑信長父子行安土
下知之ヲ催江州之諸將上洛之ヲ雖招筒

井一悪無道之罪不與之織田七兵衛左大坂
城番依為婚與之
太閤記云尾州堀江城陸川信雄卿と秀吉
以既り及鋒楯一か林勢州木造り堀一陸川
と富田平右衛門近丞と有人互當と一入呈
修之由
甲陽軍鑑云信玄代惣甲州右水守の互當流
弱井以右左衛門

伊達成実記云我等家中遠藤駿河ト申者
申候ハ敵取出之番平田左京小旗ニ候會
津ハ細々使ニ罷越懇切之由可申候左京
亮處ハ天文敵地ヨリ參候由申上候中義
重公政宗公ハ申上ラレ先弓銃炮打候事
被相止候取手城ノ番窪田ヤライ番モ如
跡々仕候ハトモ銃炮ハ不打申左候ハ
八月初ニ御無事相濟云々

大友興慶記云 朽綱親満 君命をたもてきり

起り逆心を承り天是を罰し終つて親満

より中幸とて多岐の城に司りたるはれとて

城者若弘右近衛左衛門助勇力を申りて本

丸吉のつゝれを臣國より持たせしむる親満

二乃丸吉陣を東 西

又云 藤原目 藤原目の城を志賀を臣親満居

城岡より三里西山中より所よりあり親満家

信阿南云石高の尉惟秀を博者よりあるを

り

太閤記云 尾州大山 大山北城を主として中河

勤右高の尉を居置きしむる勢州嶺の城を

者より角勝入打使て大山の城をもちて斗ふる

事たりとふる幸也云々

又云 藤原 藤原秀吉公輝宗賢者と名し世をられ

城乃南少を下げ是路より先き世に具

ふと用事一むり〜とぬき移麻竹葦とあ
かきり打田〜は難抱や思ひぢん隙の
ふらり扇風の語り終にふき退ききり畧即
府内の城番として大友宗麟義統父子入多む
ふ

又云宰相秀家秀家終まり共を呼びてをうた此
瀆を悲ひ出畧中おもを〜ゆ〜に金山海に玉り
ぬ小西の家を城番を執り〜に終に西海の祝

倭刷之事を志揃州志勅の様子とまを
うに語り〜を〜かきみよのや〜に申上
きり

初井日記云龜山合天王、城二ハ能頼大

學之助城代トモテ居候取出城トモ二ハ

在番、衆ニテ候

奥羽永慶軍記云赤館合船尾山城守カ在

陣コソ味方ニ程遠ケレハ危シト佐竹ノ

大将ヨリ再三ノ使来リ滑津ノ城ヲ開テ
佐竹ニソ歸リケル因茲滑津ニ八田村宗、
顯ヨリ城番ヲソ入置ケル

毛利家記云秀吉公ヨリ秀元縁邊ノ儀可
被仰付五騎十騎之体ニテ可致帰朝益山
浦ニハ手前ノ人数ニ元清ヲ相添テ置可
申トノ御説ニテ元清御在番也

矢島十二頭記云四十人ノ在トモ矢島ノ浪人

仕と米澤多勝殿少張ノ城番人出向ノ酒田
北島石ノ所ノ城代信太修理トヨリ矢崎四ノ
人ノ在トモ一十四言中多ク

又云矢島を仁智保殿領分り成りて八雲城子
菊池長右衛門殿を以城番に任じ之を被任

武林雜話云 豊後守阿蘇と云ひ
くまの守阿蘇と云ひ 阿蘇と云ひく府内

臼杵四ヶ所の城郭多に入居り中津川ノ物リ
石白り小倉ノ少張可任此條城番ニ母里石富

は中付所警方管を兵衛其外より役人共其
方自方のまゝ中付急中津川く可移引取と日を
定移り越ぬ付日限を御遠一粟山と日田野隈の
城を立寄中津川く移り可也

管沼系圖云定仍新八郎関原御陣時定仍

勤駿河興國寺城番同府中両所番

松原自休手録云慶長五年七月伏見在番

本丸鳥居彦右衛門西丸内藤弥次右衛門

息小一郎大手門松平主殿松平五左衛門

若狭少将畷中丹後田邊、城細川玄吉守之

云、後七月二十日攻之城兵糒々發矢石

堅郭外然慶三三條亞相来テ令和睦并德

善院為名代前田主膳正在番不八月廿三

日寅剋破鞞屋口云、秀信可為自害正則

種、制シテ令入尾州岐阜在番入正則カ

兵増補家忠日記云慶長七年五月八日佐

竹力押へ上ニテ松平伊豆守信一鈞命ヲ
奉テ常州江戸崎ニ城番ヲ勤ム
土屋知貞私記云昔長十九年方阪西陣ノ者
所ニ以當ニ條以城以當以積炮喜日度懐フ
以清炮極積ニ之ニ亟ホカノ小田原以城以當老
即陣及海右京亮夏以陣近急一黨力若根
根府川以所ニ以園所共ニ守之
以城番を城代ノ副あり凡首羽の他ヲ赴ク

本陣ニハ城代を之ニ免テ留ルキ一むる輩皆
城番のありありされと申懐すも門櫓多ク
以て城代乃人数ナシにてワカリ難キ事
あり是を以て將士ヲ命じて若其人数を
率て門櫓を以て守らしむれば以て城番
あり或る者多ク在る者亦多クあり但
ありて守らざる時を城代を城番の由りて免
せりと申すも人数の多サハ城の大小に

礼るありし一又依初り寺傍に寺を築く事案に
多博代多ありて城を築く事ありし事あり
何り申し定まれば寺子の人数たゞしき事
さらに又寺副を設けし事ありし事あり
加番とのり尚定者加番の條を合考考ふべし

定番

加番

上佐國高岡郡津野山民家所莊文書云基

高花押字交弓矢一若く言大野見城考定
番子一人存城佐和寺一信忠寺水能寺田
地寺所可々扶持れ涯分多油断一心掛り可
可考番子多懸件多長兵衛可中必取也
依考後日此件天文十二年十月廿四日石
田長右衛門とのり
出依國高岡郡大野見民家所莊文書云磐
田城定番之條中自可考同心祝者水考番

終身所中何如終身事少公抑之付

可弥之忠為軒要也弘治二年五月廿七

日田上為右侍つとむ義辰花押

安土日記云元龜元年六月廿八日本下藤

吉郎為定番横山被入置云

織田家譜云元龜元年六月廿九日合戰於

姊川中横山城以下皆陷贈首級三千餘於

京都即進兵圍和佐山城既而使丹羽長秀市

橋九郎左衛門水野下野守河尻與兵衛為

定番而歸

松原自休手錄云元龜三年十月中旬信玄

出甲府遠州夕夕飯田攻落兩城天野宮

内右衛門居遠州定番久野城巡見時

濱松勢率四千餘騎出三箇川信玄可討

取之下知

甲陽軍鑑云高天神水内河内散向為也此

事跡河より武田上様合居跡河先方小身直
参立乾天野宮内右衛門と一所り定立版を大
将片々信州定立者の千部名騎六部名足りの
侍大将在十部名ありし人を跡しぬは是
千部名氏改より長部名より大倉より人数五
名合三子録乾に括を如くあり家一も渡移る
事跡三子をくるとるは此後よりはてす

同未書云山縣八組共二九百八十騎の内

大熊三十騎遠州小山、定番相木八十騎
御跡備残而八百七十騎也内藤八組八頭
共二六百騎、内組衆半役ニシテ百七十
五騎手前モ五十騎兼輪ニ置残テ三百七
十五騎也

増補筒井家記云松永彈正少弼久秀ハ信
長公ノ麾下ニ属シ佐久間右衛門尉信盛
カ組トナリ大坂門跡ノ付城ノ定番トシ

テ天王寺ノ邊リニアリテ戦功多カリケ
ルカ天正五年八月十七日ノ夜ニ附城ノ
番役ヲ引拂云々
安土日記云天正七年四月晦日七兵衛筒
井維住越前衆池田ニ至テ御陣ノ處ニ越
前衆御暇被下皈國其外伊丹表御取出定
番被仰付候
家忠日記云天正七年八月七日北ノ夕

城ニ當松平玄蕃務殿ハ房三郎子前共ニ
三人九月九日家中新治右定當宿好
嘉永十四日定當宿好ニ
柴田退治記云天正十一年四月二十三日
渡名聞大河押寄北莊城彼城郭勝家累年
相持為定番入置兵三千餘人衆也
伊達成実記云伊達上野足輕ヲ少出ニ端
合戦候畧中東ノ方ニ又取出ノ普請ヲ被成

定番三片平助右衛門又被差置候

當代年孫云其長七年六月十一日本目佐

後守大久保右衛門土岐山城守杉平五郎

高門同園防守同日十三日笠間へ出張し

其追出候を其儘し同十四日水戸城守初所

に更守其れより佐後守右衛門其可へ付置

り通し水戸城守杉平園防守在番仕加當

右藤内陸守由良信乃守其長沼新少等也

土屋知貞私記云其長十九年大坂陣之

其所より其為濃加當八千五百石右大島弥三

其五千石同茂多倍三千五百石右大島久左

衛門

福島正則分限帳云定番衆七百四十六石

二斗蟹才藏吉長二百石星野喜三同坂井

彦左衛門二百五十石猪子新二郎三百石

川井三郎左衛門二百十七石三斗松田太

郎右衛門

抄本正定書にソノ前の所書より見え
定書と向一かたに休暇をく書
事と秘する事ありてあり
すれと初自一これに定書の附きあり

抄定書加書とソノソノ書も城番の事には何

事と定書とソノ事書日不退り城をゆるすは

ありあつての城番に交替して警備を勤む

る事ありあつたに定書は定書とソノ事

り加書と定書前條にソノ事一と云く城番

士の副とありて警備する輩をソノ事
吾妻
鏡

漏りお録元年十二月十日西侍多入り
例一手を以て日所始被置定書人と云ふ
をソノ事と定書は定書ありての事
と云ふ定書の古より何れに定書

陣代 又稱軍代

長門本平家お語云

九郎大夫判官
被後四玉條 判官ソノ

事との後きり名簿食度の代書と一とソノ事
くせんをソノ事と義理り事書を定書と
かへすに事の事と事と朝敵を定書と

首をまゝにして以て之を祀にすは事也との給大
伊勢三ノ宮義基ノ少孫と云ふと云ふれども
志ぬる所ありて之を祀る事也との所給を以て
陸奥公板根八幡宮文書云名到陸奥國此家
朝之式部伊賀左衛門三郎盛光同伊賀左衛
門次郎貞長同伊賀四郎光重代太田九郎
時氏同式部河津光俊代小河又河津時長
右支十一月二日由教書同十二月二日由

催但并廿日令到事也言お催一族等同廿
四日所馳来也依若到如件建武二年十二
月廿四日

相馬文書云爰奥州令教事先日粗檢捧置
進お漏る輩進所令言上也物又三冬武親
大夫兼頼年少之召代官氏家十段入道道
被所令加判形也云々曆應二年三月廿
日 按斯時兼頼無著
時兼頼の探題あり

東乱記云 河越夜 氏康亦常陸國小田ノ政

治ノ陣代管谷ト云者ヲ夕ノニ如此取圍

マレスハキ様ナシ御邊ヲ頼候間如何ニ

モシテ菴城ノ左衛門大夫ヲ助ケ玉ハサ

モアラハ河越ヲハ其方ハ明渡スハシ合

戦ヲナサハ多勢ニ無勢難叶ト佗ケレハ

管谷此由ヲ披露ス

室町日記云 江口之要 要害可憐 江口乃要害之要害

ふ世敵をうたむら知れて其後花あう中

多うをーあをぬー中略のいふをたー何時も

一存後流り出ゆれうをけ様をのうら下を可

能と存まるとーを一回子移ゆをまふ安見並

政此後り回さるまふ安見代家もを後田典

八郎重政軍代子赤澤大新等 与力の人々に

ハ由及河日新保玉菓薬師も生田ちとを宗と

て都令二千仁木右京亮の代家り大服金

孫を大將とて之を何れと

今川記云 三浦成小 三浦石衛門者引間城

主飯尾逆心、時父大原頼朝アレハ陣代

トシテ人数ヲ連悴、心操有之其上無比

類美童ニテ氏真公御寵愛、間後ニハ小

番衆、頭ニ被仰付候父大原ハ三河國、

郡代トテ吉田城ニ在城也

申陽軍鑑云 永禄二年六月生信州松

本末テ少子を出され六月末に阪富ニ在り

甘利左衛門尉馬場民部助三人の侍大將

被仰付飛彈至、此多法ニ以テ之ヲ中ニ後彼

境目よりとりて之ヲ格本智之長坂長閑入道

指添飛彈至押、一課訪はる小宮山丹後を陣

代々古事書七月末より少治陣也

又云 傳書何分玉 中、四 傳書何分玉 付死英忠者人 遺跡知少夫

至二十八歳迄以武勇之人陣代可被申付但

於堪忍分其不足可後之物子及十八歳之
聖手其速に命行被皮以下可還附多以誓
詞可被_ニお定_一之事

又云信玄他又信玄分別の事、惣別五年已
來此物大ると思ひ利をまゝをく紙に取手
あまう_一可_ニお定_一之事被_レ信_中三年のる我死_レるを
かくして其を志_レる免_レる_レ信_中三年のる我死_レるを
信_中三年のる我死_レるを
信_中三年のる我死_レるを

只信_中三年のる我死_レるを
信_中三年のる我死_レるを

同未書云永祿七年廿利左衛門馬ニテア
ヤマチ任三十一歳ニテ病死也子息三郎
次郎幼少故米倉丹後陣代ニ被_レ仰_付也
松野系圖云綱高大膳亮丹波守後民部大
輔ニナルハ才ノ時父討死故ニ資通陣代
ヲ勤ム
松原自休手録云天正四年春高天神ハ可

松原自休手録云天正四年春高天神ハ可
松原自休手録云天正四年春高天神ハ可

入兵糧トテ勝頼遠州城東郡出張畧小笠
原与八郎山縣カ勢ニノ手ニテ勸横須賀
加大須賀寛助太夫以足輕戰小笠原山縣
カ陣代小菅五郎兵衛出此勝頼備二十七手
甲陽軍鑑云横須賀横須賀ノ城ニテ小笠原
原山縣之兵多勝頼之乃手ニテ手有テ如働也
畧中山縣畧大將亦亦其共山縣從者有也
小笠原之兵多勝頼を陣代と定ルヤ付ラ多小付テ山

縣之兵多勝頼と申合然引極子是と云山縣
三原兵衛仕置考多何たりありを以テ如此
又云勝頼被甲有三人砂汰きく横井市
川伊清言工役云隨言是是甲州先方之也
又訴人岩間大將左衛門一切事カ与信玄公時ノ
こと之也与織田某勝吉右衛門日下部之右衛門軍
代冬平岩七ノ助ト申付大將也是ハ家一譜
代有たり

官會津新參衆長井、御人数ヲ以屋ナト
リ、城責落ナテ切ニ仕候
初井日記云小野木谷返忠條天罰モ知ヌ嗚呼者
欲心ニ闇ミテ父母妻子マテヲ捨テ比興
ヲ振舞ソノ覚悟浅猿々ヨソ候ハ是ニ付
テモ攝州、陣代小野木平左衛門澄友谷
石近重廣ハ係ル不義者ニ組スル法ヤア
ル云々

奥羽永慶軍記云慶長五年大森合戦條由利ノ人
早打ヲ以テ秋田ニ告シカハ城之儀実季
陣代トシテ湊二郎五郎同久五郎同典膳
百餘騎ヲ率ニ加勢トシテ大澤ニ馳着ケ
大坂軍記云慶長十九年十二月二日早天
下先多何茂陸を前少儀迄之陣を取取
惠軍少下急事なす付成程物静に仕れ

り井伊掃部直孝より多陣あり均く惣旗炮
を一通法多しとて其間を上りて自城中に不及
中惣軍あり色なき強れ將軍少く大まに
警終ひ直孝事兄此軍代とし佐和山の人
類を召入れ人難治あるは是を母々如何様
大少所様少身にまぬとて直孝切腹可仕名早
と正信信吉へ孫おと家様子事上云々
、林傳代を傳代ある何事にも何事主人

代是てを少法よりそのを代友といふ
ありはなるは陣より城を難多を城代と
いひ所領を難多を郡代といひ軍陣の代
友を陣代といふ難多よりはありて代友と
ありは難多は是利ある時よりそれく
ありはなるは少くありてありありありあり
陣代といふ内にも少くは差別何れも主人知
弱の町より家様中より長長なるを此内

にて両長のより其代官を以て軍務の
とより ^常の政務をも攝するを侍代
と云ふ又一時は侍にて主人を執事
まじりてある時係中人を以て侍代
と云ふ又庶士の輩にては知少の如く
を臨時に故ありて軍役に任じし
一家の輩を侍代を勤むるものと大名家
と異なるは中なりしを軍代と云ふ

も別り故あるは其侍を軍陣の代官
と云ふ意あり

武家名目抄第五十五冊

明治十一年九月

服部
伊藤

久
賢
校



